

アルカナ通信 Arcana Newsletter 402号

2016年 4月10日(日) 発行 April 10th No.402



神様の御契約

ダニエルフロスト

「これらの事後、主の言葉が幻のうちにアブラムに臨んだ、「アブラムよ恐れてはならない、わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは、はなはだ大きいであろう」。アブラムは言った、「主なる神よ、わたしには子がなく、わたしの家を継ぐ者はダマスコのエリエゼルであるのに、あなたはわたしに何をくださろうとするのですか。」アブラムはまた言った、「あなたはわたしに子を賜わないので、わたしの家に生れたしもべが、あとつぎとなるでしょう。」この時、主の言葉が彼に臨んだ、「この者はあなたのあとつぎとなるべきではありません。あなたの身から出る者があとつぎとなるべきです。」そして主は彼を外に連れ出して言われた、「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみなさい。」また彼に言われた、「あなたの子孫はあのようなになるでしょう。」アブラムは主を信じた。主はこれを彼の義と認められた。また主は彼に言われた、「わたしはこの地をあなたに与えて、これを継がせようと、あなたをカルデアのウルから導き出した主です。」(創世記15章)

「主は少年時代に、誘惑にたいする過酷極まる戦いを耐えぬきました。その戦いは、全人類、とりわけ教会にたいする主の愛を攻撃するものでした。ここでは、それ以降の主にかんして、内的意味から見て、叙述を続けていきます。未来の状態への不安があっても、主には約束が固められました。

それと同時に、教会の状態が減びに近づきつつあるとき、終末がどのようなかが示されました。しかも従来の教会に代わって、新しい教会が息を吹き返し、天的なみ国がかぎりなく増えていくことも示されました。」(天界の秘義 1778)

人生に絶望感を持ったり、回りを見回して、なぜこんな悪い立場におかれたのか、どうやったら抜け出せるのか、もう一度やりなおせないものか、誰しも考えたことがあるかもしれません。そういう時わたしたちは両親、教会、友人他、その方法を教えてくれる人を必要とします。わたしたちが気づかなくても、主はわたしたちを良い方向へ導いておられます。

イースターの話の特徴は、イエス・キリストが自然的人間

と内的神性の違いをよりはっきりと示し始めたことです。主は起こるべきことへと近づいていましたが、完全に見捨てられたような思いでした。この話は自分が絶望の状態にいることを思い起こさせます。これは新約聖書の表面上の意味のもつ力です。絶望を乗り越えた主を自分自身の救い主として見上げます。

多くのキリスト教会は、キリストの相反する二つの側面を解決するのに苦しみます。主は天と地の神様でありながら、わたしたちと同じように苦しみました。それぞれの教会はこの神秘について独自の理論を作り出し説明しています。単純に読めば父の為に息子が犠牲になったように理解されます。

しかし新教会の神学はそれには理由があるとします。つまり、主はマリアを母として、私たちと同じように自然的な体をもって生まれました。この体には悪霊が誘惑できうる人間の弱い傾向に満たされていました。そのため主は一生の間、常に誘惑に耐え、内的神性はその誘惑をひとつ一つ拒否してゆきました。真のキリスト教 102 には次のようにあります。

「主はその人間性において存在されましたが、いまでもマリヤの子でもであると信じられており、こんなふうにキリスト教の世界では、たわごとを口にしています。マリヤの子であったことは事実ですが、今でもそうだと考えるのは、本当ではありません。というのは、あがないのみわざをとおして、母からくる人間性は、すでに脱ぎすてられ、おん父からの人間性を身につけられたからです。だからこそ、主の人間性は神性を帯び、そのうちでは、神が人にましまし、神人にましますということです。母からの人間性を脱し、父からの人間性を身に帯び、こうして神人になられたということは、主がマリヤをご自分の母と呼ばれなかったことから分かります。」

同じ節でスヴェーデンボルグはマリヤに会っています。

「わたしに一度、母マリヤと話す機会がありました。あるとき天界で、わたしの頭上に、絹でできたような白いころもをまとった姿が通り過ぎていくのを見ました。かの女はしばらく立ちどまって、かの女が主の母であったと言いました。主はかの女からお生まれになったこと、主は神となって、かの女からとられた人間性をすべて脱ぎすてられたこと、したがって今はご自分の神として礼拝していること、しかも主には、神性のすべてが宿っているため、だれも主を、かの女のおん子として、認めてほしくないとのことです」



すなわち、誘惑を通して自然的人間を脱ぎ去ることが主の使命でした。それは「主の教義」にあります。

「主は死にうち勝たれました。それは地獄に勝ったということです。そのあと栄光を帯びて天界に上られました。以上は教会で周知のことですが、まだ知られていないことがあります。それは主が、戦いすなわち試練・誘惑をとおして、死すなわち地獄に勝たれたことです。それと同時にそれによってご自身の人間性を栄化されたことです。十字架の苦難は最後の戦いであり試練・誘惑でしたが、それによって勝利と栄光を得られました。

以上については、預言者の書やダビデの詩篇にいろいろ記していますが、福音書にはそれほどではありません。試練・誘惑は幼少のときからありましたが、福音書の記述では荒野における試練・誘惑、そのあと悪魔によるもの、そして最後にゲッセマネと十字架上での苦難に要約されています。」（主の教義1 2）

ゲッセマネの園で主はあまりに激しく祈ったので汗が血のようにしたり落ちたとルカによる福音書にあります。マタイによる福音書で主は杯を過ぎ去らせてくださいと祈ります。ここで神がはっきりと離れているように見えますが、それは必要なことでした。天界の秘義7 1 6 6 に次のようにあります。

「神性の掟は秩序の掟です。虚偽が蔓延した状態にいる人のための秩序の法則は、彼が絶望に陥る程蔓延させられなければならない、そうでなければ蔓延の役立ちが最大限に生かされない。つまり誘惑が絶望にまで増えるのは、主のゲッセマネの誘惑、（マタイ 26:38,39、マルコ 14:33-36、ルカ 22:44）、その後の十字架上で（マタイ 27:46）、主は更に絶望に陥ることで明らかです。：主の受けた誘惑は誠実さの誘惑のパターンであり、だからこそ主は「わたしに従うものは皆、自分の十字架を負わなければならない」（マタイ 10:38;16:24）と言われたのです。なぜなら、主の栄化は人の再生の段階を表すからです。（3138,3212,3296,3490,4402,5688）そして、再生は大抵誘惑によって達成されます。」（天界の秘義 7166）

それからゲッセマネの園で主はユダに誘導されたローマ人に逮捕されます。パリサイ人による最低の屈辱を受け、彼らはポンテオ・ピラトにキリストを十字架にかけさせるように説得します。そこから主の最大の誘惑の話が始まります。十字架の受難です。マタイによる福音書に次のようにあります。

「そして三時ごろに、イエスは大声で叫んで、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と言われた。それは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。」

（マタイ 27:46）



これこそが、人間の絶望の

どん底です。主が自分の息子をあきらめたこととれます。しかしこの瞬間、深い絶望の中で、ルカでは次のようにあります、

「時はもう昼の十二時ごろであったが、太陽は光を失い、全地は暗くなって、三時に及んだ。そして聖所の幕がまん中から裂けた。そのとき、イエスは声高く叫んで言われた、「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」。こう言ってついに息を引きとられた。」（ルカによる福音書 23 章 44~46 節）

キリストは神様と一つとなり、全ての預言が満たされました。主はこの時をもって、全ての地獄に秩序をもたらし、主が肉体であった（みことば）を通して地上と天界を結びつけ全てを支配下に置かれました。天界はそれを本当に探す人に全てに開かれました。

絶望にあっても、主は絶対に私たちから離れられることがないと覚えておくべきでしょう。たとえその様に感じるがあったにしてもです。わたしたちには自分を再生する力はなく、主が必要であるということです。わたしたちの悪への愛を最終的に手放し、主イエスキリストの哀れみを求め、天界への道に導かれるために。

これは主がわたしたちに与えられた契約です。

「人は自分を調べたあと、しなくてはならないことが二つあります。祈願と告白です。祈願とは、哀れみを乞うことです。自分が悪いと思うなら、その悪から離れる力を与えられるよう、また善をするための方向づけと情愛を願うことです。

「人は、主なくしては、何ごとをすることもできない」（ヨハネ 15・5）。

告白とは、自分の悪を見、認め、承認して、自分があわれな罪人であると実感することです。主のみまえて、自分の罪を数えあげる必要はありませんし、そのための赦しを乞う必要もありません。

罪を数えあげる必要がないわけは、本人が自己を点検して、その悪をはっきり見ており、本人がはっきりしているかぎり、主もそれをはっきり見ておられるからです。そのように自己点検にまで導かれたのも主です。その悪をあばき、悲嘆の心を起こさせ、それと同時に、悪から離れて、新しい生活を始めるような意欲を起こさせてくださるのも主です主のみまえては、罪の赦しを願う必要はありません。それには理由があります。

第一には、ここで人の罪が帳消しになるというのではなく、遠ざけられるわけで、人がそのあと罪に抵抗し、新しい生活に入れば入るほど、遠ざけられます。どんな悪にも、数え切れない欲情が、糸球のようにまつわりついていますから、そのような欲情が一瞬で消滅するわけではありません。自分を改善し、再生させるに応じて、少しずつとれていきます。」（真のキリスト教 539）

畑 生 命

川原春雄

英知の本質

人は合理性に従って、自由に根差して行動するよう、神の秩序によって定められています。合理性にしたがい、自由に根差して行動することは、自力で行動することになります。実際、自由と合理性という二つの能力は、人間固有のものではなく、人間の中にあっても主のもので、人が人である限り、人から取り去られることはありません。なぜならこの二つがなかったら、人は自己改革が不可能だからです。悔い改めることもないし、悪に対抗して戦うこともないし、悔い改めに相応しい実を結ぶこともできません。自由と合理性は、主から人間に与えられているものですから、人はそれに基づいて行動します。したがって、人は自力で *ex se* 行動しているのではなく、あたかも自力で行動しているように行動しています（生命の書1 01）

結合して離れられないものが3 つあります。愛、知恵、そして生活の役立ちです。一つが離れると、あとの二つは地に落ちてしまいます。（啓示による黙示録講解3 5 2）

いろいろの知識があり、ある程度の光でそれを感じとり、それを分かるよう口にできる人がいても、その知識が愛にむすばれていない場合、その人に英知があるとは信じないでください。英知が生まれるには、愛がその情愛をとおして働くときです。愛にむすばれていない場合、消えてゆく大気中の流星か、落下してくる星のようです。愛にむすばれている英知の場合、たえずかがやく太陽の光のよう、恒星の光のようです。英知に属する愛は、人が悪と偽りの情欲ともいえる悪魔の群れに、背を向ければ向けるほど与えられます。（神の摂理3 5）

自然性の中には、各種各様の科学知が存在します。地上的・物的・現世的なものにかんする科学知があります。これらは外部的感覚、すなわち肉体的感覚に直接根ざしたもので、最低部にあります。それよりわずかに内部的なものとして、民事とその統治組織、法規や法律があります。それよりいっそう内部的なものとしては、道徳的生活にかんする科学知があります。以上のどれよりも内部になると、霊的〈いのち〉にかんする科学知があります。



霊的〈いのち〉にかんする科学知こそ、教会の諸真理です。人はそれを、従来教義だけに依存していましたが、これは科

学知に他なりません。しかしそれが愛の善に根ざす場合、科学知を越えます。霊的光に照らされると、その光のおかげで、科学知をそれなりの秩序で、足下に眺められるようになります。

人は、以上のような科学知の諸段階を経て、理知へと上っていきます。その段階を通して、科学知によって、人の精神は開かれ、その結果、霊界からの光が流れ入るようになります。（天界の秘義 5934）

（天界の秘義 9723）

未成年者の場合、準外部の自然性より高い見地から、ものごとを考えることができません。感覚的なものに依存して、自分の考えを形成します。

② ところが成長し、感覚的なものから理由づけ結論を下すとともに、準内部的自然性から考えるようになります。時がくると、感覚的なものを越える諸真理を、感覚的なものから、形成するようになります。しかし依然として、自然の中にある事柄の中に留まります。

こうして成人して大人になり、自分なりの合理性を築いていけば、準内部的自然性の中にある事柄から、より高度の諸真理に通じる合理性をつくりあげます。これは準内部的自然性の中にある事柄から、抽出されたような思考概念であって、学問の世界ではこれを、理知的概念、非物質的概念と言います。それにたいして、

自然性の両面からくる科学知に根ざす概念は、感覚の世界から抽出したものですから、物質的概念と呼びます。

こうして人は、理性の力で、この世から天界に向かい上昇します。とはいえ、主から善をいただかないかぎり、理性の力では、天界へ昇れません。主からの善は、絶え間なく臨在し、流入として注がれます。そしてもし善がいただけるなら、諸真理も与えられます。善の中でこそ、あらゆる真理は、もてなしを受けるからです。諸真理が与えられれば、理解力も与えられます。その理解力あってこそ、天界にいたることができます。

（天界の秘義5 4 9 7）

シグシネストヴェッド「著作の要点」より転記。

マリッジ モアツ
Marriage Moats（結婚を守る堀）
— Great Length（抄訳）
ローリー オードナー
by Lori Odhner

物語がどのように脳に影響するか、分析画像を友人が見せてくれました。生理学的なものを含んだもので、物語が神経の結合を導くことを示しています。それはメッセージを聞いている人がそれを自分の人生に当てはめることができるというものです。読み聞かせは鏡のようなもので、ひとり一人を結びつけます。香り、音、感触、色などの生き生きとした描写は脳の中

の動力、知覚、前頭葉など様々なエリアを目覚めさせます。その上、ドーパミンが現れてその経験全体に感情で満たします。

子どもたちが幼い頃わたしは寝る前にお話をしました。その殆どは森の妖精や動物などが出てくる作り話でした。

人の話を聞くことで、自分達に焦点を当て過ぎて行き詰まっている時等にそれを切り抜けさせてくれます。

あるワークショップでの話し手が、妻の言ったたった4つの言葉が気に障ったと言います。「私たち話し合いが必要よ。(We need to talk)」彼は激怒しましたが、彼女には訳が分かりません。しかしある日、彼は自分の父親にまつわる記憶をほどくことが出来ました。気むずかしく、妻が言ったような命令がされるということは、厳しい罰を意味していました。そのような背景を知って理解することで、妻は彼に同情を感じました。

自分たちの人生の物語をお互いに話すことは、とても助けになります。それは表面下の人生への小さなドアです。

Love, Lori Caring for Marriage

みことば

教会外に生まれた、いわゆる異邦人や異教徒は救われ得ないと言う逸説があります。〈みことば〉がなく主を知らないのがその理由です。主を知らなければ救いはないからです。しかし主の慈しみは普遍的で各個人に及んでいると知っただけでも、彼らも救われたことは明らかです。(天界の秘義2589)

ジェネラルチャーチ東京グループ 集会案内

2016年4月17日(日) タワーホール船堀 305号

2016年5月15日(日) タワーホール船堀 305号

2016年6月5日(日) タワーホール船堀 305号

礼拝: 午前 11:00~12:00 時

勉強・交流会: 午後 14:00~15:30 時

◎聖書(新改訳)をお持ちくださるようお願いします。

今は聖書の詩編を学んでおります。内的な意味にこだわるのではなく、まずは自然的な意味から主の愛を汲み取り、内的な意味で、その愛をさらに深めることができると願っています。

午後の勉強・交流会では、教義中心ではなく、相互愛と心の触れ合いを何よりも大切にしたいと願っています。主の中にあって参加された方々が励まされ、勇気づけられ、慰めを受けられる場にしたいと願っています。というのも、それが教会の本来の姿だと思うからです。

● 礼拝会場: タワーホール船堀

〒134-0001 東京都江戸川区北葛西 4-1-1

TEL:[03-5676-2211](tel:03-5676-2211)

● 礼拝会場ホームページ: <http://www.towerhall.jp/4access/access.html>

● 連絡先: 栄世一牧師

〒134-0081 東京都江戸川区北葛西 2-26-21

TEL:[090-2473-6694](tel:090-2473-6694)

参加ご希望の方は、栄牧師までご一報、お願い申し上げます。「ジェネラルチャーチ東京」ホームページ: (スケジュールもアップしています)

<http://newchurchjapan.org>

4

オンライン・プロジェクト

去年まで利用していたホームページのホストを変更し、新たにホームページを作成しました。新しいサイト作成ツールを使って試行錯誤しているのですが、少しずつ完成させてゆく予定です。ただいま在庫がなくなってしまった「真のキリスト教上巻」をオンラインで閲覧できるようにする予定です。



編集後記

3月下旬に息子の卒業式を兼ね、親戚回り、アルカナ出版の書籍を卸している会社を訪問に東京へ行きました。新宿の小さな卸業者です。社長さんは忙しい中時間をとってくれました。図書の売り上げが伸び悩んでいることを伝えると、まずオンラインで試してみることを勧められました。書籍として発行することで一番の問題は、回転が遅いこととその為の場所の確保です。社会がどんどんオンラインしていく中、その時代の流れに乗っていかねなければならないとも考え、まずは真のキリスト教をオンライン化することにしました。少しずつですがホームページに載せてゆきます。(峰子記)

アルカナ出版

〒771-1402 阿波市吉野町西条字西大竹30-2

Tel 088-696-5417(留守電) Fax 088-696-5418

携帯 080-6382-4402(お急ぎの場合)

郵便振替 01610-1-7463

銀行口座:阿波銀行 上板支店

普通預金:1119618

発行・編集者・翻訳 フロスト・ダニエル・峰子

E-mail: arcanashuppan@gmail.com

Web:<http://www.arcanapress.com>

